様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　22 年　6 月　7 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：　2007～2009
課題番号：　19710215
研究課題名（和文）近現代北アメリカにおける「華僑アイデンティティ」形成の史的再検証

研究課題名（英文）Historical Verification of the Identity Formation of Overseas Chinese in North America in the Modern and Contemporary Eras

研究代表者
園田　節子（SONODA SETSUKO）
神戸女子大学・文学部・准教授
研究者番号：60367133

研究成果の概要（和文）：北米華僑が積極的に自らを「華僑」と自己表現しはじめるのは、1905年反米ボイコットに端を発する中国国内の中華ナショナリズムの高揚に共鳴した時である。以後、北米華僑は日常的には原籍地に基づく自意識を持つが、居住国と中国の二国間関係の歴史的転換時に、ときに過剰な強いナショナリズムと現地生活の肯定を含んだ華僑アイデンティティを表面化させた。日常の華僑社会で力を持つ華商や団体ではなく、華僑社会の中立的立場の知識人がこうした華僑意識の高揚と強化を図る役割を担った。

研究成果の概要（英文）：To express their own identity, overseas Chinese in North America began using the term “overseas Chinese” from the time of China’s Anti-American Boycott Movement in 1905 when overseas Chinese there sympathized with the rise of nationalism in China. Since then, while maintaining a hometown-based identity in ordinary times, at historical turning points in the relationships of their two countries (their country of residence and their country of origin), the overseas Chinese in North America have brought to the surface a nation-based identity which at times consisted of an excessive nationalism as well as a positive affirmation of their sojourning lives in North America. At such times, it was not the Chinese merchants or the Chinese associations that ordinarily entertained political power in the community but rather Chinese intellectuals in neutral positions who had migrated there that assumed the role of uplifting and reinforcing the sense of overseas Chinese identity.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
2009 年度	400,000	120,000	520,000
年度			
年度			
総　計	1,700,000	270,000	1,970,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：地域研究・地域研究
キーワード：東洋史、華僑・華人史、アイデンティティ、米中関係、コミュニティ、移民、トランスナショナリズム

１．研究開始当初の背景

報告者は、平成 13 年度特別研究員採用課題で 1840 年代末から南北アメリカに渡る無資本の広東人契約労働者「華工」の実態と、それに伴う 1870 年代末からの清朝政府の華僑保護政策を研究し、清朝の駐米公使が現地の中国人商人「華商」と協働した体制が、中華民国期の「僑務(政府の華僑関連事務・政策・教育活動)」の原初形態に該当することを証明した。しかし華工を研究軸としたため、現地で真に影響力を持つ華商の事情や、本国の「官」と現地の「商」の関係、そして現代も観察できる、ナショナリズムとビジネスの絡まった華僑社会と中国本国の独特の相互認識の構造分析が不十分であった。そこで平成 17 年度若手研究 B に、①19 世紀後半南北アメリカ華商の実証研究と②そのアイデンティティの分析の二本柱構成の研究計画を申請、採択された。しかし採択年度に科研費基礎資格のない機関に一時就職したため、やむなく資格喪失による辞退となった。

本研究は、この平成 17 年度申請計画を基礎とし、現代的関心を反映して後半部②を重点化したものである。華僑アイデンティティ自体の研究は、国内外の成果を俯瞰すると、過放や朱慧玲の手堅い成果を除けば、主に華僑や新華僑出身の研究者、すなわち華僑自身のディスコースに依存する主観的傾向が強く、批判的視座と社会科学的手法での「華僑アイデンティティ」再考の必要が残されていた。

２．研究の目的

19 世紀後半の南北アメリカ現地の華商にはその移動パターンに、都市に集中する、内陸へと東漸する、沿海部での交易に携わるといった活動圏域の広域化が見られた。また香港や広東珠江デルタの物産を輸送する、すなわち中小規模貿易を担う華商が商品を同郷人に商うことで、チャイナタウンに自己完結型の経済を形成していき、清朝在外公館と結びついて華僑社会へのプレゼンスをさらに強める。こういった要素が 1880 年代までに表れた。馬敏は中国沿海部商人が「近代紳商」として第三領域化したと論じるが、南北アメリカでも共時的に同様の現象が見られたのである。

このような近代の北アメリカ中国移民社会の内部における華商の有力層化の完了を踏まえ、本研究では 3 年の助成期間中に、現在研究領域では事実上空白である、北米華僑の自覚的言説への分析をおこなう。20 世紀に環太平洋地域における国際関係の主体となった中国とアメリカ、この二国間関係の転換時における華僑アイデンティティの構造を、本国中国との連動性を包含しつつ実証史学の手法にて分析する。

中国におけるナショナリズムや民族運動の国土全国化については国内外に歴史研究の蓄積がある。本研究ではそれらを基礎研究として参照にしつつ、北米への史料調査をおこない、華僑のアイデンティティ形成という側面から考察を進める。個人に対する国民国家の影響力が最大であった、20 世紀の人間と国家の姿を考える。

３．研究の方法

（１）20 世紀の華僑社会において、ナショナリズム・社会運動・アイデンティティの形成／再形成の面で、中国国内との共振が起こった類似の事件の前後を調べる。華僑アイデンティティの生成と転換に影響した米中間の歴史的事件を特定できるよう、先行研究のなかで一般に華僑にとって重大事件と位置付けられてきた事象の前後の北アメリカの華僑の論説を比較分析し、アイデンティティ形成に与えた影響力の深度を考察する。具体的には次のように時期を設定した。

①1905 年　反米ボイコットの前後
②1911 年　孫文の革命運動成功の前後
③1937 年　日中戦争開始の前後
④1943 年　排華法撤廃の前後
⑤1946 年　国共内戦前後
⑥1949 年　中華人民共和国成立の前後
⑦1965 年　アメリカの改正移民法施行の前後

（２）上述の時期において北米華僑社会で執筆された歴史史料を調査し、収集する。対象とする史料は、華商の直接の声が掲載された、アメリカとカナダ太平洋岸現地の華僑新聞の論説が主となる。これに、補助史料として手紙や個人文集などを渉猟する。具体的には次の地域での調査となる。

①アメリカ：アメリカ華人歴史学会とカリフォルニア大学バークレー校エスニック・スタデーズ・ライブラリーおよびバンクロフト・ライブラリーで、『中西日報』をはじめとする北アメリカの華僑新聞（時事論説・一面ニュース・華僑コミュニティ向けの記事・告知)・華商の手紙・会館資料・領事館資料。

②カナダ：バンクーバーのブリティッシュコロンビア大学付属図書館で、華僑新聞や会館史料のほか、カナダ人研究者の実施した華僑

コミュニティでのインタヴュー調査記録。またビクトリアにてビクトリア大学付属図書館の所蔵する会館史料。
③中国：広東省広州市の広東省図書館分館の中山文献舘ならびに香港九龍博物館で、僑郷において成功者として脚光を浴びた北米華僑に関する資料。また急速に充実しつつある中国で出版された中国語研究書（旧香山県地方史や会党・幇、20 世紀の華僑関係）。
④日本：北米華僑新聞に記事が転載され、いわば情報の連動関係にあった香港・広東・上海の中国語新聞『香港華字日報』『同文滬報』『申報』など。その調査は東京大学や一橋大学の付属図書館、ならびに京都の国立国会図書館関西館でおこなう。また、東京の外交資料館所蔵の簿冊史料ならびに東洋文庫・東洋文化研究所における関連資料。

（３）調査・収集した史料から華僑アイデンティティを分析するにあたり、米中二国間の国際関係転換時に現地華僑の間で起こった議論の中で、「華僑」という言葉を用いて自己表現するときの論理構造に注目する。とくに、中国本国で起こる政治変動や事件に対して、また居住国と中国間の国際関係の変化に対して、居住国自体の事柄に対して、それぞれどの程度の温度差を持って受け取り、どの程度自らに引き付けて議論しているか着目する。

（４）北アメリカ現地の中国語史料については既刊のレファレンスの他、北アメリカ現地史料への造詣の深い中国系研究者・識者に適宜連絡をとり、助言を得る。

（５）収集史料を精読分析し、学会や研究会で、19 世紀の世紀転換期と 20 世紀の華僑アイデンティティ構築に関する研究成果を発表する。また論文にまとめ、学術雑誌に投稿掲載する。

４．研究成果
（１）主な成果
中国の域外で華僑が対応・選択・決定をする意思の総体や回路として「華僑アイデンティティ」を捉えた。とくに華僑アイデンティティの創生を捉え、構造を理解するために、20 世紀初頭の実態を丁寧に把握することに努めた。
20 世紀初頭のサンフランシスコ華僑社会に暮らす人々は、日常では出身地毎のまとまりで基礎的な人脈形成をする原籍地アイデンティティが前提である。その一方で、同郷人の居住する地理的広がりを強く認識し、広東省から北米を経由し中米まで達する世界的視野を持っていた。これが本国中国で起こった事件のうち 1905 年反米ボイコットの最中と 1911 年辛亥革命直後で、中国一国を凝視するナショナルな視点に切り替えられ、「華僑アイデンティティ」が生まれた。
北米華僑には世紀転換期から、僑郷の近代化事業や災害救済に募金し、出身地との紐帯があった。20 世紀初頭に北米で中国語日刊紙が相次いで創刊され、その論説や各地からの投稿の掲載によって、華僑の意識や興味の対象に一定の方向性が生じた。そうした現象は 20 世紀を通じて維持されていた。その底流を成したのは、本国政治党派の機関誌や広報誌よりも、北米華僑独自の立場を自覚するプロテスタント牧師や新聞記者、現地生まれの華人世代などの、同郷会館の華商とも異なる新しい華僑知識人が運営する媒体であった。そこでは僑郷を越え中国を「祖国」「本国」とし、華僑と言う独立したカテゴリーを成立せしめることが意識された。以後の米中関係の転換期の度、定式化された自己表現の創出と、その使用頻度の増加と定着、そこから募金活動の勧めや民族の自信と矜持に帰するロジックや言説が発展した。このナショナルで強い感情表現は一時的で、事件が収束すると解ける。
カナダ華僑のアイデンティティ形成に関しては、現地調査によって、特に 1960-70 年代の現地華僑団体会員のインタヴュー記録とその周辺資料から、当時大学教員であったカナダ人研究者が、冷戦期に華僑に向けられた一般社会の偏見とは断絶した視座で、華僑と信頼と協力体制を築きながら調査し、これが後に華僑のアイデンティティ形成に影響を及ぼしていると結論付けた。
「北米華僑」は一括りにできず、アメリカを不可欠の主体とする 20 世紀の世界史においても、カナダとアメリカそれぞれの現地華僑はそれぞれ別個の姿勢であった。中国や華僑を位置づける、その違いが華僑の言説に多大な影響を及ぼしてきた。
本研究で最も特徴的な成果は、遠隔の地域と地域が連結する近代以降の環太平洋地域形成のダイナミズムとグローバルな国家と人間の有機的関係が「華僑アイデンティティ」という着眼点によって実証できたところである。

（２）研究の位置付けとインパクト
①近年の華僑華人史研究で進みつつある議論が、革命と華僑史の分離対象化である。中国近代史領域において華僑は孫文の革命運動とのつながりを重視され、現在も盛んに取り上げられる学術テーマである。確かに孫文は北米華僑社会で講演活動や募金の呼びかけ、同盟会への勧誘活動などを積極的におこない、支持者となった華僑のあいだに革命思想を広げて中国への愛国心を鼓舞する、一定

の役割を果たしたことは、今回の研究の中でも確認できた。しかし、華僑社会で最初に現代につながる初の愛国主義運動と華僑独自のアイデンティティ形成がみられたのは、それより早い 1905 年反米ボイコットの時であった。用語としての「華僑」は、このとき華僑社会で初めて自覚的に用いられた。こうした分析から改めて孫文の北米華僑社会における支持者獲得活動を分析すると、孫文と関わることで華僑の自覚や愛国心を高揚させた人々は、北米華僑社会の階層化によって、特定の階層に限定されていた。華僑社会の階層に関しては、たとえば後の広東商団事件によって、孫文は中華会館に代表される有力華商層の支持を失っていたことも明らかになった。華僑アイデンティティの歴史的意義を分析する過程で、華僑と革命の固定的視座を再考し、むしろ階層化社会という現地華僑社会の構造の中で考察を進める、本研究の姿勢が定まった。

②華僑アイデンティティに関する議論のなかには、特に現在の華僑を解釈するにあたって、国民国家に縛られない自由な存在として理想化した華人ディアスポラ像を提出する主観的議論が絶えない。しかし歴史学独特の長期的視座から分析してきた結果、華僑華人の自己表現は、居住国と中国の国際関係次第で高まって運動化したり、自己表現を控えたり、また再度表面化しはじめたりといった可変性を呈している。すなわち、華僑アイデンティティは国民国家の動向と密接に結びついたもので、華僑の自由度を強調する議論も、国民国家の状態変化の中で相対化されるべきであると言える。また、日本における華僑アイデンティティの研究は在日華僑を対象とし、特に国籍との関係を扱う議論が主である。本研究で近現代の北アメリカ華僑からアプローチした結果、北米華僑のアイデンティティは文明、自由や民主主義、そして市民とは何か等の議論と連結しており、国籍との議論はむしろ日本における特徴的議論であると指摘できよう。華僑アイデンティティに関する日本の研究成果を、地域性として相対化され得ることを提出し得た。

（３）今後の課題と展望

北米における華僑アイデンティティの発展を時系列に、関係する新聞論説等の分析を進めたが、その過程で、日本の動向や日中関係、日系移民などの「日本」との関わりも重要なファクターであることが見えてきた。北米華僑の自覚を促す議論が中国への愛国心とともに強まったり、白熱したりといった華僑アイデンティティ強化の背景には、たとえば 1905 年の反米ボイコット時には同時期の日露戦争、1943 年排華法撤廃時にはアメリカと中国の対日同盟・日本の中国侵略、1965 年の移民法改正では日系移民との関係などが絡んでいた。しかし、現段階で日本を加えての詳細な分析は十分ではない。華僑アイデンティティは単に米中関係が作用するのではなく、日本をも複数の要因のひとつに組み込みながら強化される歴史的発展を経てきている事実が確認できたため、今後はより多重的・多層的な分析から成る研究に発展させる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 園田節子、サンフランシスコ華僑の社会空間――孫文に共鳴・孫文を拒否するまで、孫文研究、査読有、47 巻、2010、pp. 42-57

〔学会発表〕（計６件）

① 園田節子、太平洋を越えるひとと「国家」、孫文研究会秋期例会、2009 年 11 月 21 日、神戸 KCC ビル
② 園田節子、同郷から「華」人へ、日本華僑華人学会 2009 年度大会、2009 年 11 月 14 日、大阪大学中之島センター
③ 園田節子、アジア移民研究からの問題提起――南北アメリカの中国移民と「本国」、日本移民学会 2009 移民研究ワークショップ、2009 年 9 月 12 日、神戸中華会館
④ 園田節子、1880 年代南北アメリカ華民の自治構造と在外公館――ミクロ・リージョンとしての移民社会 - 本国間関係の形成、「移動と共生が創り出すミクロ・リージョナリズム――東アジア・東南アジア地域研究の融合にむけて」研究会、2008 年 9 月 20 日、京都大学
⑤ 園田節子、近代国家と海外移民――２０世紀初頭サンフランシスコ中国人移民社会のアイデンティティ変容、日本移民学会 2008 年度（第 18 回）大会、2008 年 6 月 29 日、東京学芸大学
⑥ 園田節子、「華僑アイデンティティ」の創成――20 世紀初頭サンフランシスコ華民社会を例に、神戸華僑華人研究会第 118 回例会、2008 年 4 月 19 日、神戸中華総商会

〔図書〕（計１件）

共著

① 王柳蘭、園田節子、山田孝子他著、地域研究コンソーシアム『地域研究』編集委員会編、昭和堂、地域研究――越境と地

域空間、2010、総頁数 197

６．研究組織
(1)研究代表者
園田　節子（SONODA SETSUKO）
神戸女子大学・文学部・准教授
研究者番号：60367133

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし